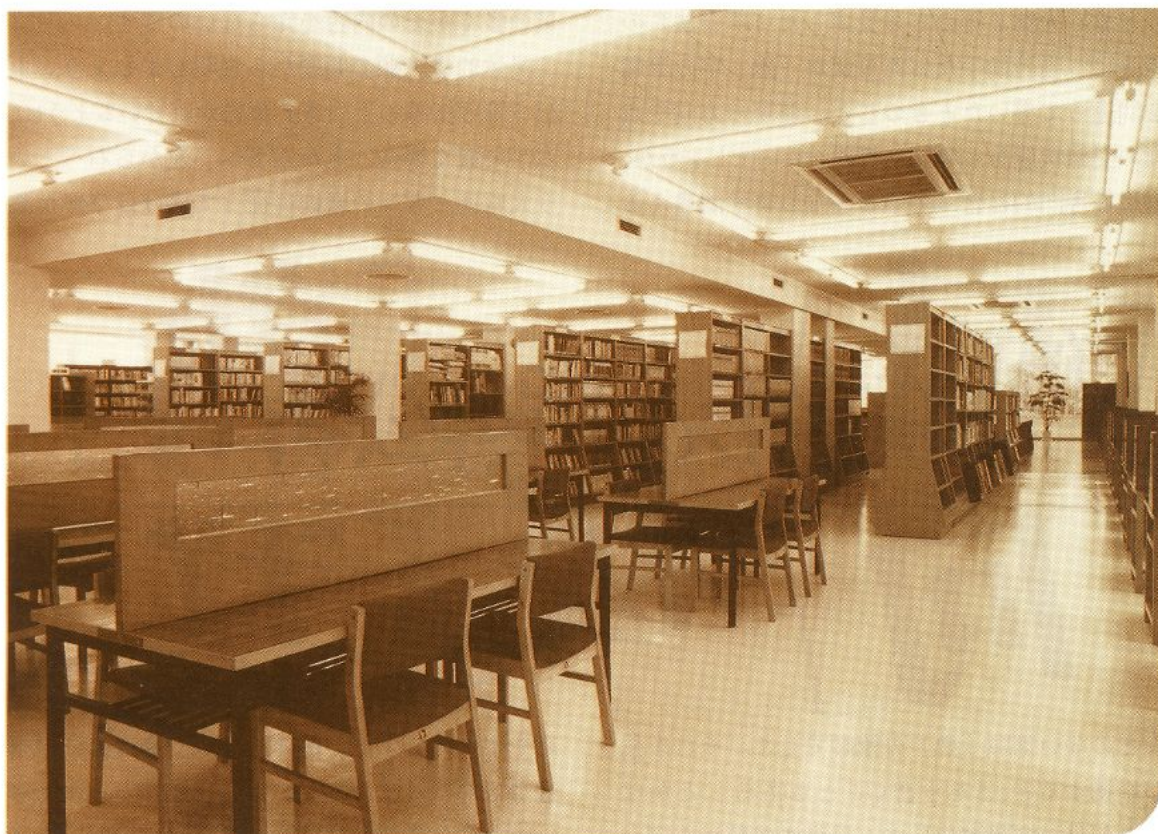




# みすず



## 目次

筆順と字形の指導公害

「考える」こと

本との幸せな出会い それは絵本から始まります

図書館ブラブラ

パネルシアターを見て

児童文化研究大会に出席して

図書館アンケート調査 集計結果

図書館ニュース

周東 清芳…………… 2

菱田 隆昭…………… 4

幼児教育科2年 馬場 智美…………… 6

国文科2年 小泉 拡子…………… 7

幼児教育科2年 浅倉 千春…………… 8

幼児教育科2年 桑原 幸枝…………… 8

…………… 9

……………12



皆さんは、小中学校の国語の書き取りで、「木へん」のたて画をはねたからとか、「手へん」のたて画をはねなかったからとかの理由から、「×」をつけられて、いやな思いをしたことはありませんか。

私には毎年、書道コースの授業で孫過庭の『書譜』を取り上げるたびに思い出すことがあります。大学2年のとき受講した『草書法』の時間に、当時助手だったN氏が「熟」字の筆順を間違えて書いたときのこと、運筆の方向や点画の交錯状態から単純に見誤ったのでしょうか、書道を専門的に習っている者ならまず間違える

教員の無知に起因するあまりにも低劣な指導が、いたるところでなされてきていますが、筆順については『筆順指導の手引き』（昭和33年、文部省）、字形については現行の『常用漢字表』（昭和56年）の「字体についての解説」を読んでいれば、国語ざらい、漢字アレルギーはかなり防げていたと思われます。実際のところ現場の教員の多くがその内容を知らないのです。

具体的に筆順の問題から説明しましょう。上記『筆順指導の手引き』に書かれているように、右手で書く場合、上から下へ、左から右へという大原則と8つの原則に従って書けば字形が整

# 筆順と字形の指導公害

助教 周東 清芳

ことのない筆順「熟」の筆順でした。それを私が指摘すると、「そう書くこともある」とかなんとか言って誤魔化して、最後まで訂正も何もないままに『草書法』の授業は終わってしまったのです。

何かのはずみで誤ることは誰もあること、早口、早とちりの私などは、君子ではさらさらありませんが、自ら冒した過ちを改めるのに大変で、懺悔々々の毎日です。教師が過失であるにせよ誤ったことを伝え、それをそのまま生徒たちが信じて覚えてしまえば、「嘘」を教えたことになるでしょう。教師の「嘘と罪」は最近の政・官・財の「嘘と罪」に匹敵するほど重いかもしれません。

私が経験したように、筆順と字形について、

えやすいのですが、例外もあって絶対にこの筆順ではなければならないという法はどこにもないのです。文部省は、ただ書きやすい順序を示しただけです。主に国語の授業で、「その筆順は間違っている」と言うのを耳にすることがありますが、この指摘が間違っています。「その筆順は好ましくない」とか「もっと書きやすい筆順があるのに」とか言うべきです。文部省が言うように、間違った筆順などないのですから。

ただし、教員養成課程の授業ではそうはいきません。一般の人間が書きにくい筆順（字形を整えにくい筆順）は好ましくないのに、学生の書く文字の形が乱れていて、それが筆順の違いによるものであれば、端正な形を書きやすい、よりよい筆順を徹底して覚えさせる必要があります。

ます。私の授業ではそれをかなり繰り返し指摘し、修正させていますし、字形を整えやすい伝統的な筆順なども覚えてもらおうとしています。

「何」を例に筆順が違うと他の文字を見誤ることを見てみましょう。「イ」(人偏)は誰もが同じ筆順、「可」の2画目はどの画を書くかで、「何」に見えたり「向」に見えたりすることが確認できるでしょう。平仮名の「か」は、やや早書きして2画目と3画目の順序を間違えて書くと、「や」に見えませんか。「も」はどうでしょう。1画目の釣り針のような画を最後に書いて、下を書く文字に運動を連続させようとする、カタカナの「キ」に見えませんか。変わった筆順で書くところなのです。

次に字形、これは筆順よりも厄介な問題です。何しろ先生に形を見られてしまうのですから。十数年前に知り合った、東京都内の某私立高校の国語の先生が、あるとき私にこう言いました。「周東先生、私は漢字にうるさいですよ。入学試験の書き取り問題で木へんや糸へんの縦画をはねたら、許しません。絶対バツをつけています」大学でも講義しているほどの偉い先生なので、気の弱い私は口答えなどできず、自分のクラスの某高校を受験する生徒だけに、書き取りで不合格にならないよう注意を与えただけでした。(その生徒は合格しました)

まず、現行の『常用漢字表』の「(付)字体についての解説」の「第1 明朝体活字のデザインについて」に

常用漢字表では、個々の漢字の字体(文字の骨組み)を、明朝体活字のうちの一種を例に用いて示した。現在、一般に使用されている各種の明朝体活字(写植文字を含む)には、同じ字でありながら、微細なところで形の相違の見られるものがある。しかし、それらの相違は、字体の上から全く問題にする必要のないものである。

と記し、15項目に分類して例を示していますし、

「第2 明朝体活字と筆写の楷書との関係について」には

常用漢字表では、個々の漢字の字体(文字の骨組み)を、明朝体活字のうちの一種を例に用いて示した。このことは、これによって筆写の楷書における書き方の習慣を改めようとするものではない。字体としては同じであっても、明朝体活字(写植字を含む)の形と筆写の楷書の形との間には、いろいろな点で違いがある。それらは、印刷上と手書き上のそれぞれの習慣の相違に基づく表現の差と見るべきものである。

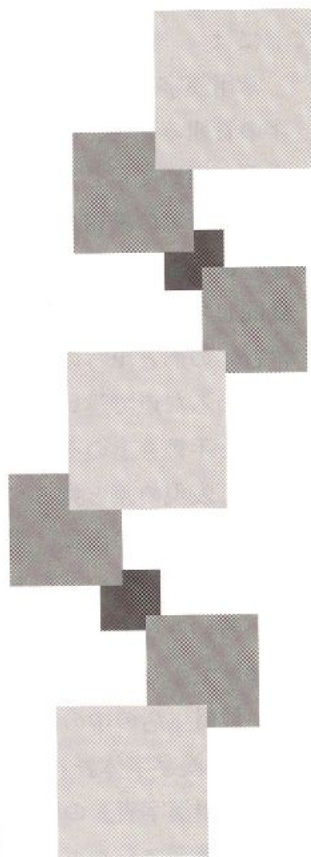
と記し、さらにその後、明朝体活字の特徴的な表現と筆写の楷書の表現との違いと、筆写の楷書のいろいろな書き方をそれぞれ分類して具体例を挙げて示しています。

忙しい教員生活の中のほんの少しの時間を割いて、『当用漢字字体表』の「使用上の注意事項」や『常用漢字表』のこの部分を読んでいさえすれば、漢字アレルギーのような公害は発生しなかったでしょう。

しかし、昭和21年の『当用漢字表』告示直後から、現場の教員が大変苦勞していたことも事実でしょう、戦後の混乱期に、2年半の猶予があったにせよ、1850字を『当用漢字字体表』通り正確に覚えなければならなかったのですから。実は、私も中学生時代に『当用漢字字体表』どおり覚えてしまった国語教師の授業を2年間も受けさせられて、楷書なのに水平のバランスで書かされたり、2画の部分(ヒ)を3画で書かされたりと、それはひどい仕打ちを受けた被害者ですが、戦後の義務教育の中で被害にあった国民の大半と同様に、いまだに「公害病」の認定を受けていません。国はいつになったら「公害」を認め、補償してくれるのでしょうか。文部省はいつまで患者をつくり続けるのでしょうか。



# 「考える」ハイム



菱田 隆昭

先日、東京の公立中学校へ通う15歳の女の子が書いたレポートを『文芸春秋』11月号で目にすることがあった。「毒入りカレー殺人犯人は他にもいる」と題されたこのレポートは、中学3年生の三好万季さんが、今年7月和歌山市で起こった「毒入りカレー事件」の犠牲となった女子高生の死に衝撃を受け、夏休みの理科の宿題として書き始めたものだった。400字詰め原

稿用紙100枚を越えるこの大作は、出版社に投稿された際「本当に中学生が書いたのか」と編集部に疑われたという。それ程、問題意識、論理構成、文章力にたけたものだったのである。かくいう私も何気なく読み出したものの、その内容に引き込まれ一気に読み終えてしまった。素朴な疑問に対して新聞記事・文献を集め、各機関のホームページにアクセスし、報道と同時進行で自らの推論を裏付けていった三好さんのフットワークの良さと疑問解決への姿勢に私自身何か問題をぶつけられた感を覚えたのであった。

将来医師を志している三好さんは「もしも自分が今回の事件の真っ只中で、和歌山市で救命救急を担う医師であったらどうなんだと自問自答しつつ」レポート執筆に当たったと記している。疑問の夫婦ばかりが騒がれるなか、事件後に迅速かつ適切な処置がなされていれば4人の犠牲者は死なずにすんだのではないかという視点から事件の真相に迫っているのである。

三好さんの疑問点は明快である。「夏祭りで集団食中毒発生」との第一報が流れた時、どうして作られたばかりのカレーライスで食中毒が起こるのかという疑問。カレーには多種のスパイスが含まれており、そのスパイスには殺菌防腐の作用を持つものが多い。だからこそ「カレーは食中毒を起こしやすいインドや東南アジアでの食生活の知恵」として発達したのである。なるほど、そういわれればその通りである。「青酸カレー事件」と報道された時、TVドラマ等で見られる青酸化合物を服毒した際の症状と違いすぎないかという疑問。TVドラマ等では、青酸中毒により人が激しい呼吸困難をおこし短時間で息絶えるシーンを放映することがあるが、この事件の犠牲者は消化器系に異常をきたしながら10時間以上生存していたのだ。これまた、そういわれればその通りであろう。しかし、このような誰もが思いつくような疑問を警察・保

健所・病院・マスコミ等が見落としでしまい、あるいは各機関が各々でしっかりと検証せずに一つの意見に相乗りしてしまうことになった。そのため医療現場の対応は後手にまわってしまうのである。本人も言うとおりの「一中学生に過ぎず、一般メディアからの情報以外には何も持ち合わせていない全くの素人」が思うことである。そしてカレーから砒素が検出されたのは、事件後9日目のことであった。

この事件では、食中毒の症状とは異なるのではないかと疑問を抱きながらも「違う」とは言い出せず、そのまま食中毒の治療を続けた医師の証言が伝えられている（朝日新聞1998.8.24夕刊）。この事件の重大性を考えると、どうして専門家が「違う」と言えなかったのか残念でならない。同時に、もっともっと些細なことかもしれないが、「まあ、いいか」と見過ごしてしまっていることが、実は私たちの身の回りにも沢山あるのではないだろうか。そして、いつ大事件につながることも言えないようなことが。

私たちは日々の生活のなかにふと沸き起こる疑問を掘り下げて、「考える」ということを忘れていくのかもしれない。いや拒否しているのかもしれない。煩わしいから。忙しいから。その方が楽だから。後で面倒なことになるといけないから。あるいは本当に気がつかないほど鈍感になってしまっているのかもしれない。分からない時、迷った時、あれっと思った時、人に聞く、文献を調べる、実際己の目で確かめる、様々な方法で材料を集め、自分の頭で考え、その答えを導きだした時、自信を持って判断を下すことができよう。いずれにしても、私たちが「考える」ことをやめてしまったら、人間の歩みは止まってしまうのである。

私が以前読んだ印象深い本に『子供のためのライフスタイル・考える練習をしよう』（マリリン・バーンズ著、左京久代訳、晶文社発行）とい

う一冊がある。1985年に初版が出てからすでに30刷以上増版されたベストセラーであるため、ご存じの方も多いただろう。この本の序には「生きている以上、だれだってかならずやっかいな問題にぶつかるんだ。歯をみががなくなっちゃいけないというのとおなじくらい、きっとだ。けれど、ぶつかった問題を解決するのに必要なものは、きみはすでに持っているのだ一頭だ。事にあたって、今までだって、きみは頭をさんざん使ってきたはずだ。…どうしようもない。どうしたらいいかわからない。もうだめだ。みんながよく口にする言葉だ。ちがう。けっしてそんなことはないんだ。どんなときだって、違ったしかたで問題を見なおせるんだ。ぶつかった問題をしっかりみつめること。そして、新しいしかたで考えること。それが、この本のテーマなんだ。」と記されている。「考える」ことについてちょっとしたヒントを与えてくれる本である。少々堅いテーマと思われがちだが、22の話題からなり絵の挿入された取っ付きやすい本でもある。ぜひ一度手に取ってみてほしい一冊である。

原稿用紙100枚以上のレポートをまとめた三好さんは本が大好きな少女だそうだ。また「毒入りカレー事件」の犠牲者となった女子高生も本が好きな少女だったそうだ。三好さんは共通の趣味があったからこそ、彼女に親近感を覚え、その「死をととも他人ごとで済ますことはできない」と思ったのである。一方、1ヵ月に一冊も本を読まなかった中学生は48%、同じく高校生は67%（学校読書調査・毎日新聞1998.10.28）だそうだ。高校生の3人に2人が1ヵ月間に一冊も本を読まないことになる。これでは「考える」という行為が非常に困難になるのも当然であろう。いま私たちすべての人が本気で「考える」ことをしなくてはならない時を迎えているのかもしれない。



# 本との幸せな出会い それは絵本から始まります

幼児教育科2年 馬場 智美

おそらく誰もが一番最初に出会った本は、絵本だと思います。本いっばいに描かれた絵と、厳選された言葉の数々。それが子供たちの心をつかんで離さないのではないのでしょうか。

覚えていますか？自分が子供の頃好きだった絵本を。『はらぺこあおむし』『おおきなかぶ』『てぶくろ』題名を見ただけで思い出す人も多いでしょう。私も何回も親にせがんで読んでもらい、誰にも読んでもらえないときは一人で読んでいた絵本です。たとえ文字が読めなくてもかまわないのです。なぜなら絵を見ればおのずとストーリーが伝わってくるのですから。

先日、面白い場面に遭遇しました。四才になったばかりの女の子が、二才の弟に絵本を読んであげるといのです。その女の子は、自分の名前前の文字くらいは分かりますが、まだ言葉として文字を読むことはできません。どうするのだろうかと興味を持ち、しばらく様子を窺ってみることにしました。すると、女の子は弟の側に行くと絵本を開き、絵を見ながら勝手にお話を作って話し始めたのです。またそれが絵本のストーリーに当たらずとも遠からずで、おかしいやら感心させられるやら、子供の想像力の豊かさには心底驚かされました。そして何よりも、生き生き楽しそうに読んで聞かせている姿を見て、絵本と幸せな出会いができたんだと私は思いました。

本との幸せな出会い。それは本を読むことが楽しいと思える。そんな本と出会えたかどうかということです。誰もが子供の頃一度は出会っているのではないのでしょうか。もちろん一番最

初に出会うのは絵本です。実習中、絵本を読んで聞かせる機会が何度もありました。その時、子供たちは一瞬で絵本の世界へと引き込まれ、くいいるように絵本を見つめて、静かに耳を傾けてくるのです。大人に読んでもらい、その楽しさを知る。これが第一の出会いだと思います。

幸い私は、幸せな出会いをその後何度もすることができました。文字を覚え、自分で読む楽しさを知りました。絵本を読むときの「次はどんな絵が描いてあるのだろう」とわくわくしながらページをめくる楽しみが、活字を追う楽しさへと変わったのです。小学生の頃、絵のない文字だけの本が読めるようになるとは思いませんでした。文芸作品を読んでも理解できないだろうと思っていました。けれど、年齢に見合った本に出会い、その本から、また回りから色々なことを吸収し、さまざまなジャンルの本を読みたいと思えるようになりました。

今のところ、読んでみたいという意気込みだけで、挑戦してみるのですが途中で挫折してしまうことがしばしばあります。けれどいつか必ず読破したいと思っています。それが三年後になるか五年後になるかわかりません。それまでもっと沢山の事を吸収するため、私は本を読み続けるでしょう。その中にどれだけ幸せな出会いが待っているのでしょうか。

一番最後に巡り会う本との幸せな出会いが、絵本というのかもしれない。



# 図書館ブラブラ

みなさんは御存じだろうか。学校の図書館には色々な種類の本がある。私が短大に入りたてのころは、専門書ばかりだと思っていた。一部を除いてパッと見たところ専門書しかない。しかし、そんな本の中に意外な本が混ざっている場合がある。

例えば『サザエさんの秘密』という本だ。内容は、その名の通りサザエさんの秘密。「カツオはお笑いタレントから国会議員へ」や「サザエさんの髪は鳥の巣カット」などが書かれている。この本は、芸術・絵画の棚に置いてある。『サザエさん』の本も図書館にあるので、両方読んでみると新しい発見があって面白いだろう。

又、『猿岩石日記part1 極限のアジア編』と『猿岩石日記part2 怒濤のヨーロッパ編』という本も図書館にある。今ではもう昔の話となってしまったが、色々と問題があった本だ。この本の上の棚に、大きい本がたおして置いてあり、それにかくれていてあまり目立たないが、旅の種類の本が置いてあるところに存在する。『猿岩石裏日記ユーラシア大陸横断ヒッチハイク』

この本を読んでみたいという方は、検索機を使って調べるのもよいだろうし、自分で探すのもよいだろう。

私はよく、図書館をブラブラ歩いて回る。何もせずただ本を見て歩いている人がいれば、私と思っていかもかもしれない。図書館を見て歩いていると面白い。自分で買いたいとは思っていなかったが、読みたいと思っていた本を見つけることがある。その時の感動といたら「おお、こんなところに」とひとりごとを言うほどだ。どこに何があるなんてわからないもので、思いもよらなかったところにあたりする。その発見が面白い。

本を好きになるには、自分が本当に読みたい本を探し、何でも良いから一冊読みきる。マンガでもよいから最後まで読むということが大切なだろう。本を読むのがあまり好きでないという方は、まず自分が読みたい本を探すことから始めたらどうだろうか。きっと自分がこれと思った本が見つかるだろう。

## 本学の先生方の新刊書

(平成10年中に刊行された単独著書・共著・分担執筆)

### \* 『保育内容方法論』

新時代の保育双書9  
みらい 二千円  
菱田隆昭 先生 分担執筆

### \* 『牡丹灯記の系譜』

勉誠社 二千五百円  
太刀川清 先生 著

### \* 『長野県の図書館』

県別図書館案内シリーズ  
三二書房 三千五百円  
丸山 信 先生 著

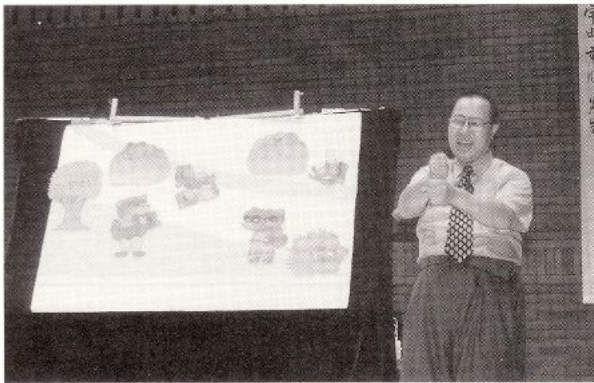
### \* 『福沢諭吉研究資料集成 同時代』

全四巻  
大空社 六万五千円  
丸山 信 先生 編・監修

### \* 『野口米次郎選集』

全三巻  
クレス出版 三千四百円  
丸山 信 先生 監修





## パネルシアターを見て

幼児教育科2年 浅倉 千春

パネルシアターを見るのは、二度目くらいでした。歌を歌いながらの始まりは、これからどんな講演が行われるのか、楽しみになってきました。私は自分では、演じた事はなかったけれど、一度は経験してみたくなりました。歌を歌いながらのパネルシアターは、お話を読みながらのパネルシアターよりも、聞き手は楽しく見ることができそうな気がしました。子供たちもとても興味を持ち、楽しめるような気がしました。特に、古宇田先生の演じ方は、楽しめました。先生は話の途中にも、シャレがあったりして面白かったです。

私が驚いた事は、一つ一つの作品に動きがあることでした。人間では、目が動くようになっていたり、動物でいえば、一つの動物がずっとそのままではなく、体と足と顔それぞれが別になっていて、色々な動きをしたり、細かいところまでもが工夫されているところがすごい！と思いました。全然動かないものよりも、少しでも動きがあるもののほうが、興味がありました。演じている人と、聞き手が歌を歌いながら、みんなで一緒に楽しめるということはとてもよいと思いました。子供たちに演じるときには、魚屋さん、八百屋さん、おもちゃ屋さん、花屋さんなどと子供たちに答えてもらいながらやるのもよいという事でした。数の勉強になったり、パネルシアターをやることによって、子供たちも色々覚えることができるのではないだろうか、今回、先生にやっていただいたパネルシアターから感じました。今はブラックライトを使ってのパネルもあるそうで、会場を真っ暗にして、パネルが光ってみえて花火などの作品は見やすかったし、とてもきれいでした。

パネルシアターにも、ブラックパネルや、切り絵

からのパネルもあり、色々なものができるんだなぁと思いました。演じる人の演じ方や、パネルをはる時に、おもしろさがでるよう工夫したりと、はり方をどうするかによっても、子供たち、見る人の興味が変わってくるものです。

今回の講演は、画面いっぱい、次から次へといろいろなパネルが出てきたり、先生のお話も、とても楽しかったです。

## 児童文化研究大会 に出席して

幼児教育科2年 桑原 幸枝

今回の児童文化研究大会は、とても有意義な時間になりました。

私は第二分科会の「浦里っ子と魔女さん」に出席しました。パンフレットを見た時に、園児数は30人ちょっと、職員も5人という小規模園ということであり、魔女さんの活動とあったので、とても興味を持てたのです。3年前から始まったようですが、子供たちを集中させるために手品をやったことがきっかけで、ずっと続いているなんてすごいです。現代の子供たちは、指示待ちの子が多く、自主的に動いてほしいという願いから、魔女さんからのプレゼントとして“種”が贈られました。(魔女は保護者)種は、経過が見れる、続けられないとできないもの、結果の出るものとして選ばれたようです。子供たちは、水くれなどを頑張り花がさいたこと、実がなって食べられたことが、満足のいくことにつながったと思います。最後に、保護者の方が自主性や意欲は楽しいという中から生まれていくと言っていました。そして、最初の卒園児(現在小学2年生)が今だに、「先生、魔女さんどうしてる?」と聞く子がいて、保育者として、いつまでこんな気持ちでいてくれるかなと思っているそうです。また、それが幸せだとも言っていました。保育者の仕事は、すぐ結果に出ることではないので、こういう形で出たことは、とてもよい取り組みだったと思うし、私も子供たちに夢のある活動をさせてあげたいと思いました。



# 図書館アンケート調査集計結果

本学図書館は、平成8年度～平成10年度にわたり、創立25周年記念事業の一環として、大幅な増改築を進めてきました。特に本年は、書庫の積層工事を手がけ、短大図書館の規模としては、県内最大の広さをもつ図書館になりました。

そこで、今秋全学の皆さんを対象に、現在の図書館の印象やイメージをお聞きするとともに、今後の図書館サービスにどんなことを要望されているかのアンケート調査を実施しました。

以下、集計結果を掲載します。

図書館サービス全般に対して、様々な要望・意見を出していただきましたが、中には図書館サイドだけでは片付けられない問題も多々あり、これらの問題も総合してよりよい図書館に改善していくよう努力する所存です。アンケートにご協力頂きありがとうございました。

## [質問事項]

1. あなたは、図書館をどのくらい利用していますか？

- ① 毎日      ② 週に2,3回      ③ 週に1度  
④ 月に2,3回      ⑤ 月に1回  
⑥ 今までに1回  
⑦ 今までに1回も利用したことがない

2. 利用したことのある人にお聞きします。図書館利用の目的は何ですか？

(該当するもの、3ヶまで○をして下さい)

- ① 卒業研究論文・レポートの調査勉強のため  
② 本を借りる(返却)するため  
③ 自習・その他場所を利用するため  
④ AVルームでビデオ・CD・LD等を視聴するため  
⑤ 息抜き、休憩、新聞閲覧、時間待ちのため  
⑥ コピーをとるため  
⑦ 教科担当の先生の指導を受けたり、相談するため

3. 上田女子短期大学付属図書館の印象はいかがですか？(3ヶに○)

- ① 館内に気軽に入りやすい、利用しやすい  
② 書架や机が利用しやすく配置されている  
③ 広く明るい図書館でよいと思う  
④ 本を探しにくい(配置がわかりにくい)  
⑤ 冷房(夏)暖房(冬)がきいていない  
⑥ 書庫に入りにくい(1998.9月以降)  
⑦ 書庫の中の本が探しにくい  
⑧ 貸出等の手続きが面倒で利用しにくい  
⑨ コンピュータがよく整備されている  
⑩ 端末の操作が面倒で、くわしい説明がほしい

4. 利用者検索端末機を利用、又はインターネットを利用したことがありますか？

- A, ① ある      ② ない  
B, あると答えた人にお聞きします。端末機は  
① 利用しやすい      ② 利用しにくい  
C, Aでないと答えた人にお聞きします  
① 操作が面倒でよくわからない  
② コンピュータにさわることが苦手である  
③ 端末で探すより、書架で直接探す方がよい  
④ インターネットに興味がない

5. 図書館サービスについてどう思いますか？(2ヶに○)

- ① 貸出期間をもっと長くしてほしい  
② 借りられる冊数(点数)をもっと増やしてほしい  
③ 開館時間を延長してほしい  
④ 専門分野の本をもっと増やしてほしい  
⑤ 教養・読書のための本(小説・随筆)を増やしてほしい  
⑥ 係員(司書)の対応をもっと考えてほしい  
⑦ 十分なサービスがされているので、今のままでよいと思う

6. 図書館でどのような図書・資料を増やして欲しいですか？

特に強く思うもの2ヶに○をつけ、もしあれば具体的なタイトル名、出版社名を記入して下さい。

- ① 辞書・事典等参考図書( )  
② 専門分野の図書( )  
③ AV資料(VT.CD.LD)( )  
④ 雑誌・新聞・その他(小説)( )

7. 図書館全般に対して意見・要望等があればお書き下さい。

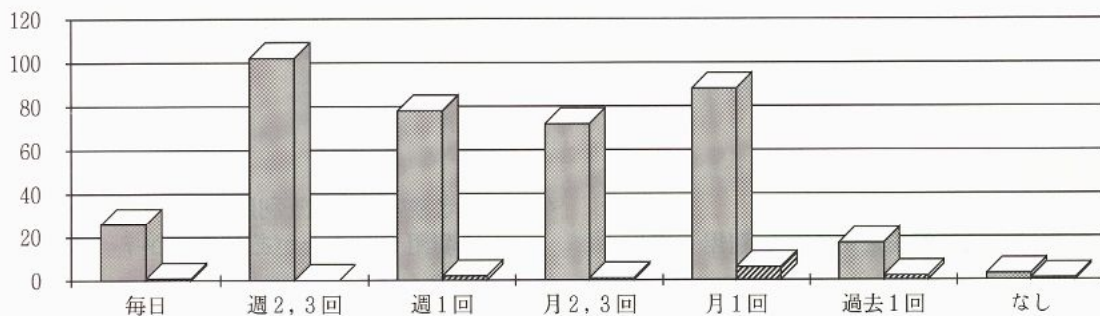
(施設・設備・備品・図書資料・利用規則等なんでも)

## [集計結果]

回収率=62% 上段=学生 下段=教職員

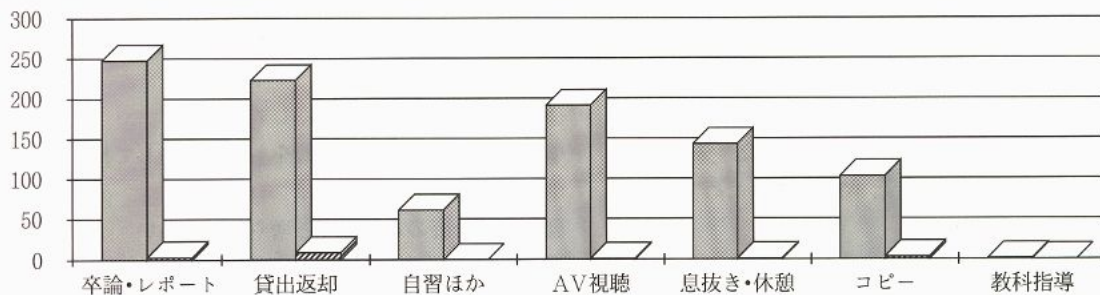
### 1. 図書館利用回数

毎日	週2,3回	週1回	月2,3回	月1回	過去1回	なし
26	102	78	72	88	17	3
1	0	2	1	6	2	1



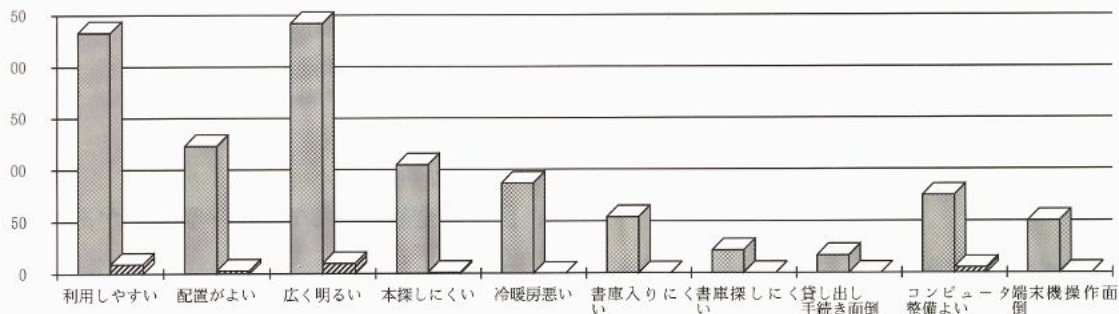
### 2. 利用目的(複数回答)

卒論・レポート	貸出返却	自習ほか	AV視聴	息抜き・休憩	コピー	教科指導
248	223	61	191	143	103	1
3	9	0	1	1	3	0



### 3. 本学図書館の印象(複数回答)

利用しやすい	配置がよい	広く明るい	本探しにくい	冷暖房悪い	書庫入りにくい	書庫探しにくい	貸出し手続き面倒	コンピュータ整備よい	端末操作面倒
233	123	242	105	87	54	22	17	75	50
9	3	10	1	0	0	0	0	5	0

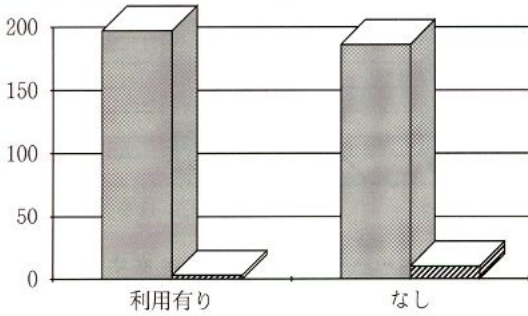




## 4. 利用者用検索端末・インターネットの利用

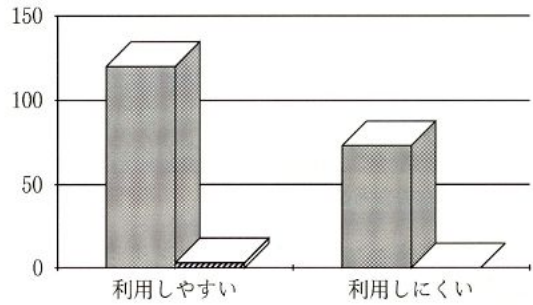
A.利用

利用有り	なし
197	186
3	10



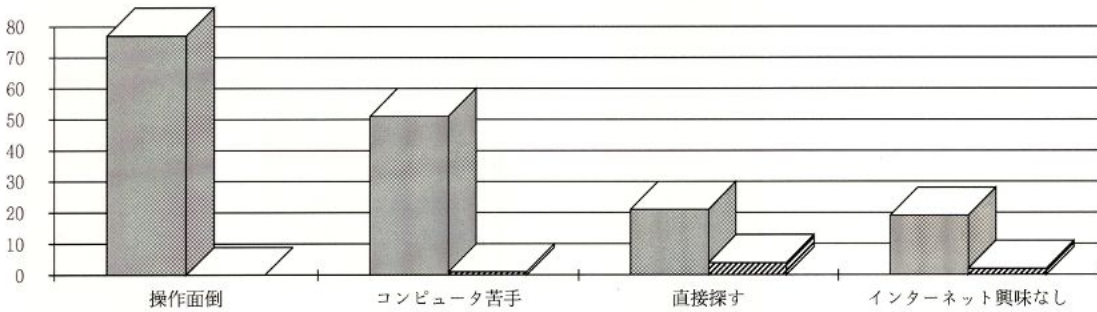
B.利用有りの感想

利用しやすい	利用しにくい
120	73
3	0



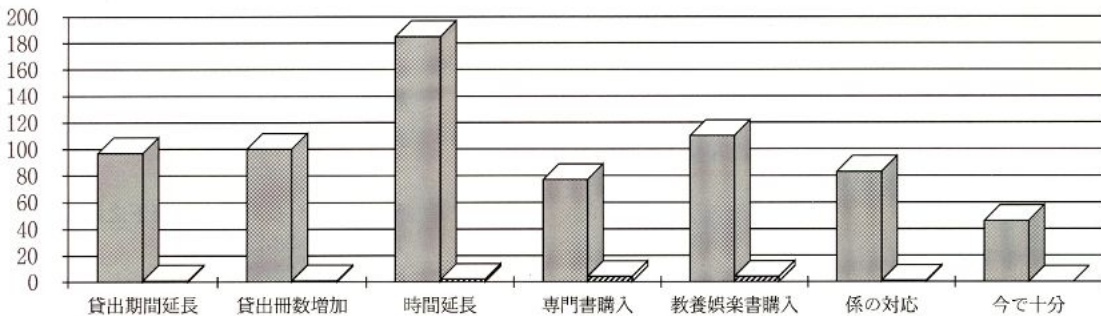
C.利用なしの感想

操作面倒	コンピュータ苦手	直接探す	インターネット興味なし
77	51	21	19
0	1	4	2



## 5. 図書館サービスについて(複数回答)

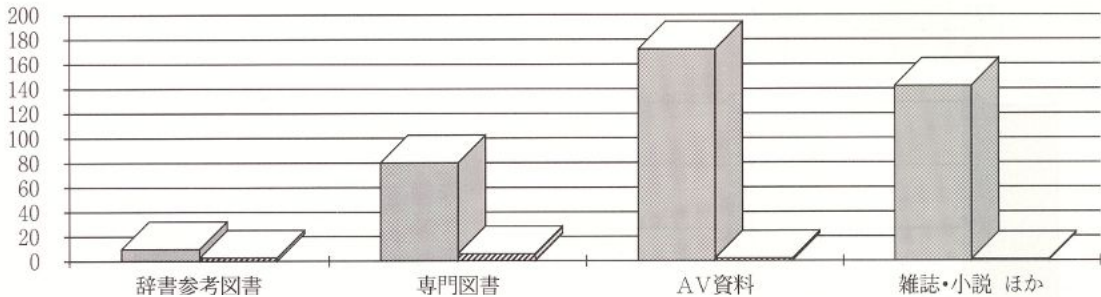
貸出期間延長	貸出冊数増加	時間延長	専門書購入	教養娯楽書購入	係の対応	今で十分
97	100	185	77	110	83	46
1	1	2	4	4	1	6



## 6. 購入希望分野

辞書参考図書	専門図書	AV資料	雑誌・小説 ほか
10	80	172	142
3	6	2	1

## 7. 意見要望 (省略)



\*\*\* ---- \*\*\* ---- \*\*\* ---- \*\*\* ---- \*\*\* ---- \*\*\* ---- \*\*\*

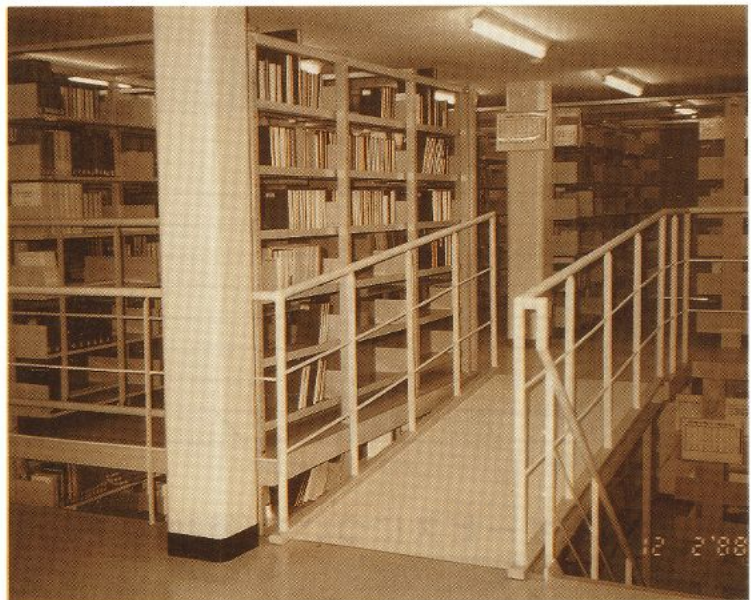
### 【図書館ニュース】

## 積層書庫完成

すでにご存知のように本年夏、書庫の積層工事が完成し、夏休みに司書課程1年生が実習を兼ね、移動引越作業を手伝ってくれました。

一昨年より進めてきた増改築計画も、若干の備品整備を残し、これにてほぼ完了したといえます。

書庫完成を機に、書庫内への出入りは自由になりました。また、閲覧室で見つからなかった本は書庫のほうで見つかる場合もありますので、一度書庫にも降りてみてください。



### 編集 後記

図書館報「みすず」第25号をお届けします。周東、菱田両先生の貴重な原稿はじめ、図書館にまつわる記事が山盛りです。どうぞお読み下さい。

図書館アンケート調査は今後の運営に大いに参考にして、よりよい図書館にしていきます。(丸山)

### みすず

上田女子短期大学附属図書館報  
第25号 1998.12.発行

編集 上田女子短期大学図書委員会  
発行 上田女子短期大学附属図書館

〒386-1214 長野県上田市下之郷乙620  
TEL. 0268-38-2352  
FAX. 0268-35-7315